畿央大学

健康科学部健康生活学科
人間環境デザイン専攻

第4回 卒業制作・論文作品集

卒業制作・論文作品集 4

幾央大学健康科学部健康生活学科
人間環境デザイン専攻

2009

The 4th Graduation Works.
Kio university
Course of Human Environmental Design.

御挨拶

畿央大学　学長

堅い樹皮から瑞々しい花の芽が顔を出し、自然はまぎれもなく春の訪れを告げております。

この度畿央大学におきましては、いよいよ開学以来4回目の卒業生の門出を迎えることになりました。その時に当り健康科学部人間環境デザイン学科の卒業制作発表につき詳細なる鑑賞の機会を得、何れも感銘を深く致しました。

自然の山野を生かした住宅建築群の構想、環境にマッチした文化的雰囲気の住宅、又材料の品質を巧妙に活用した織物、工芸品、衣装、美的センスを表現した色彩のコントラスト等、すべて大学生としての逞ましい活力と、夢が巧みに現実的な形となって発表されているものばかりでありました。まさに本学の伝統である建学の精神として徳をのばす、知をみがく、美をつくるを継承されてきた実践の姿であります。

改めて第4回卒業生に対し、今後の社会貢献への成果に期待し、一層の精進を希うものであります。併せて、本学関係教員始め、関係皆様方へ深甚なる感謝と、変わらぬ御協力をお願い申し上げ後挨拶といたします。

制 作 works

008 学長賞
OSAKA Central Park
廣岡　学

010 優秀賞
光にさわる 光木
片山 光世

011 優秀賞
"club ART" by reuse
高貝 憲平

012 優秀賞
繭から衣装へ 染織～silk clothes～
深井 美帆

013 優秀賞
鳥の巣 skyjack
外園 真士

014 都市型ホテル「relaxation」UD×GREEN 1
藤本 紗希

014 商業施設用チェア「change」UD×GREEN 2
岩本 守太

015 環境博物館「learn」UD×GREEN 3
羽根木 一馬

015 室内公園「communicate」UD×GREEN 4
深井 祐輔

016 プライベートシアター「feel」UD×GREEN 5
松本 久幸

016 オーガニックカフェ「C2～つながりを感じるカフェ～」UD×GREEN 6
安田 陽子

017 町屋の楽器調整師さんの住む家
浅野 真佐直

017 ENJOY×FASHION
～ファッションと建築のコラボレーションイベント～
有馬 佳江　土谷 早希

018 日本×アメリカ＝球場
上谷 政樹

018 近鉄五位堂駅周辺における環境色彩計画
岡田 彰悟

019 新しい街並みの形成
兼田 寛子

019 地域と共存する学生街
川中 智基

020 ホリデイ・スクール
北野 博輝

020 衣装制作 ～コンテストへの挑戦～
國吉 亜希

021 馬見スポーツアクティビティパーク
栗巣 裕貴

021 自立に向け充実された学生寮を
鈴木 理人

022 変化する収納家具のデザイン
髙松 翔太

022 「増 殖」～進化し続ける現代美術館～
田渕 沙緒里

023 Domus～集まって住むって楽しいな～
百目鬼 千聖

023 BeatPort ー音が躍動する空間ー
中澤 友貴

024 金峰閣・ライティングビフォーアフター
中島 亜紗子

024 IBARAKI PARK
西田 隼也

025 ロッソ屑に関する研究
久　武志　涌田 晃照

025 かまくら公園
藤岡 あかね

026 Album ー写真美術館ー
藤原 真梨子

026 てんりアウトレットパーク
丸谷 友哉

027 トタンの幻想
村田 侑理

027 TREE BOX
森内 杏寿

028 藍染めによる制作～タペストリー～
山下 達也

028 衣装制作～コンテストへの挑戦～
吉井　愛

029 gardening
和田 絵里香

029 kusayane café
和田 千晶

論 文 thesis

032 優秀賞
室内空間のイメージに関する研究ー壁の色と照明の影響ー
川島 那王子

033 子どもの生活アンケート調査
岡本 紗也加

034 室内環境と居住者のライフスタイル・自覚症状の実態に関する研究
左古 なつみ　中辻 麻衣子

035 道のユニバーサルデザインに関する調査研究ー橿原市八木町の実地調査ー
田仲 正人　鴇田 厚作　山岡 徹也

036 高齢者向け優良賃貸住宅の入居者の生活に関する調査研究
田森 啓祐　西川 悟史

037 直接プライミングに及ぼす制限時間の効果について
水本 遼太郎

037 子どもの自然体験に関する研究ー蚕の飼育、地域の力と共にー
和久田 直彦

040 展覧会

042 発表会

044 教員講評

制作 works

OSAKA Central Park

藤井ゼミ

計画地は大阪北ヤード。
大阪最後の一等地に里山を造った。
山肌からは建築が顔を覗かせる。
ここでは建築がランドスケープになり、
ランドスケープが建築となる。

comment

岡井先生の部屋、泊まり込み、みんなで飲んだ夜中のコーラ…正直作品よりも、たくさんの思い出と共に、最後の最後まで素敵な仲間と後輩や先生方に支えられ、作品に没頭出来た日々の方が思い出として強いです。
四年間で建築が大好きになりました。
これからも建築を大好きで居続けます。
挙げきることが出来ない程のたくさんの方々に、ありがとうございました。

廣岡　学
Manabu Hirooka

INTRODUCTION
【大阪最後の一等地利用方法の再考】

[illegible]

[illegible]

[illegible]

OSAKA STATION
NORTHERN DISTRICT

CONCEPT
【梅田の里山】

[illegible]

【建築】

[illegible]

ARCHTECTURE
【オペラハウス】

[illegible]

【美術館】

[illegible]

【調整池】

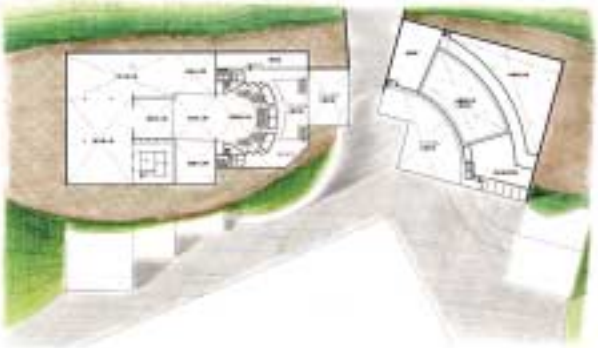
[illegible]

【セントラル・パーク】

[illegible]

INTRODUCTION

3F (GL +4000)



4F (GL +12000)

1F (GL)

3F (GL +4000)

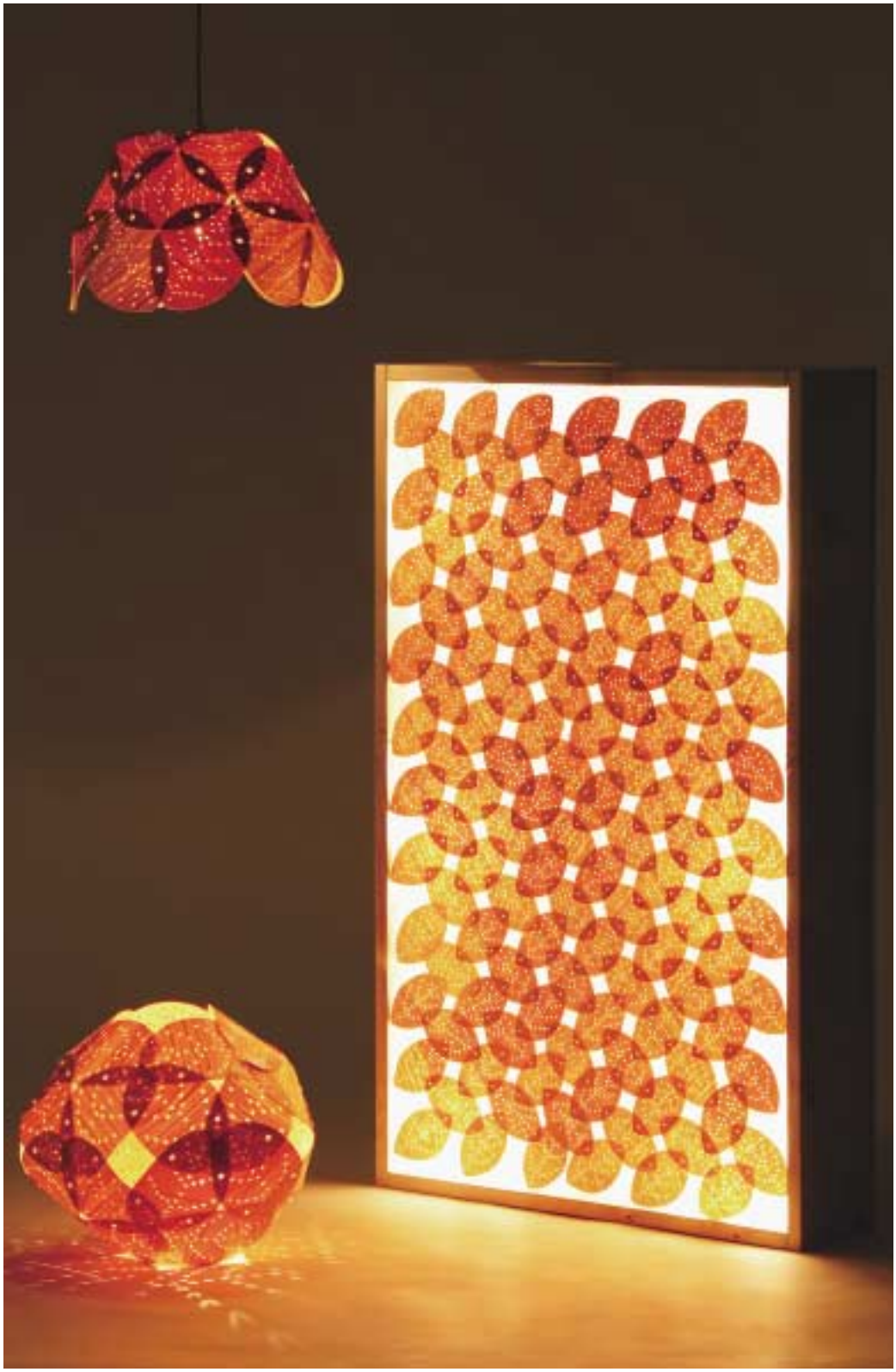
SECTION

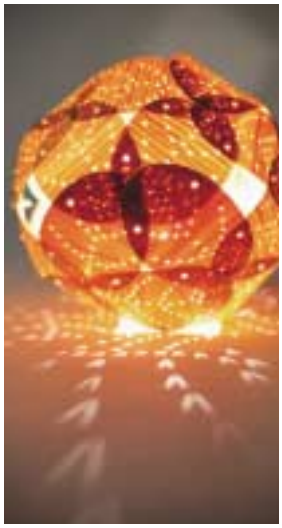
光(ヒカリ)にさわる 光木(ミツモク)

加藤ゼミ

視覚障害のある人でも楽しめる照明です。
葉の形を組み合わせたデザインで、それぞれを床・壁・天井の３つの作品でシリーズ化しています。
視覚以外の感覚を使って照明を楽しむ為に、葉の葉脈を点字のように穴をあけ、凹凸をつけています。また、表面が熱される事によって木の香りも漂ってきます。
手で触り、においを感じられる照明です。
たとえ光を見る事が出来なくても光にさわり、光を感じ、光を楽しむ事が出来ます。

片山 光世
Mitsuyo Katayama





藤井ゼミ

”club ART” by reuse

高貝 憲平
Kenpei Takagai

ストリートダンス＝アート。
アートを生む空間は直方体や幾何学ではない。
割れたコンクリートや錆びた鉄骨、複雑かつ不規則、
廃墟を思わせる空間がインスピレーションを呼び、
グルーヴが生まれる。

繭から衣装へ　染織～silk clothes～

村田ゼミ

卵から育てた蚕繭を作り、その繭から糸を紡ぎ、染め、織、衣装制作へとつづく。
真綿を草木で染めることでそのやさしい色が紡ぎ糸のやわらかさを引き立てている。
２800頭の蚕たち、木々の実り、草、木、たくさんの“いのち”がひとつになった、自然からのおくりもの。

深井 美帆
Miho Fukai

三井田ゼミ

鳥の巣 skyjack

外園 真士
Shinji Hokazono

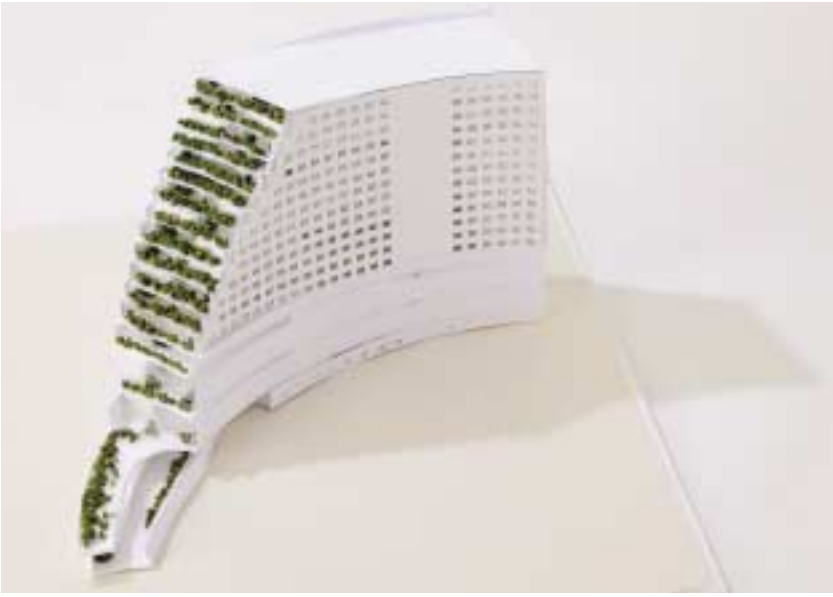
都心居住計画
えぐられた建物
インナーテラス
空に張り出た居室とバルコニー
魅力ある路上空間
空を彩る
大阪の空は住みやすい

都市型ホテル「relaxation」UD×GREEN 1

中山ゼミ

藤本 紗希
Saki Fujimoto

コンセプトは五感を刺激する空間です。グループテーマであるグリーンとユニバーサルデザインを意識しながら作りました。風が触れる感触、それによって美しい景色が見れたり、運ばれる匂いがあったり。木なら触り心地もよく、季節によって色が違えば花の香りも違います。
自然はいつも違う顔を見せてくれます。そんな自然を使うことで人工的な変化のない空間ではなく変化する空間を作り、五感を刺激する空間を考えました。



商業施設用チェア「change」UD×GREEN 2

中山ゼミ

岩本 守太
Syuta Iwamoto

この椅子は、ゼミ内で想定した「G.U.park」（公園、博物館、映画館、カフェ、ホテルが集結した施設）に設置するもので、この椅子は並び方のパターンで各エリアにマッチさせることが出来る。（両サイドが斜めになっている事と、2パターンある背もたれがお互いに重なるという事で可能になる）さらに座面は中央の支柱を軸に、シーソーのようになっており立ち座り時に利用者を支える。

中山ゼミ

環境博物館「learn」 UD×GREEN 3

羽根木 一馬
Kazuma Haneki

現代の地球環境は、悪化の一方をたどっている。奇妙な気象現象が発生し、その規模も世界規模にまで広がっている…人々の地球環境に対する関心、危機感というのは正直なところ薄いはずだ。このままにしておくと取り返しのつかないことになってしまい、人類が日々後悔の毎日になってしまうだろう。地球の緑、水、生物が存在するから人もこの地球という場所でいきていけるのだ。生きていることの原点を頭の中から離れないようにしていくことは、地球に対してではなく、人に対しての優しさも生み出していくことだろう。
この気持ちが、この環境博物館を建築する要因となり、この施設が地球環境保全に大きく貢献することを強く願う。

中山ゼミ

室内公園「communicate」 UD×GREEN 4

深井 祐輔
Yusuke Fukai

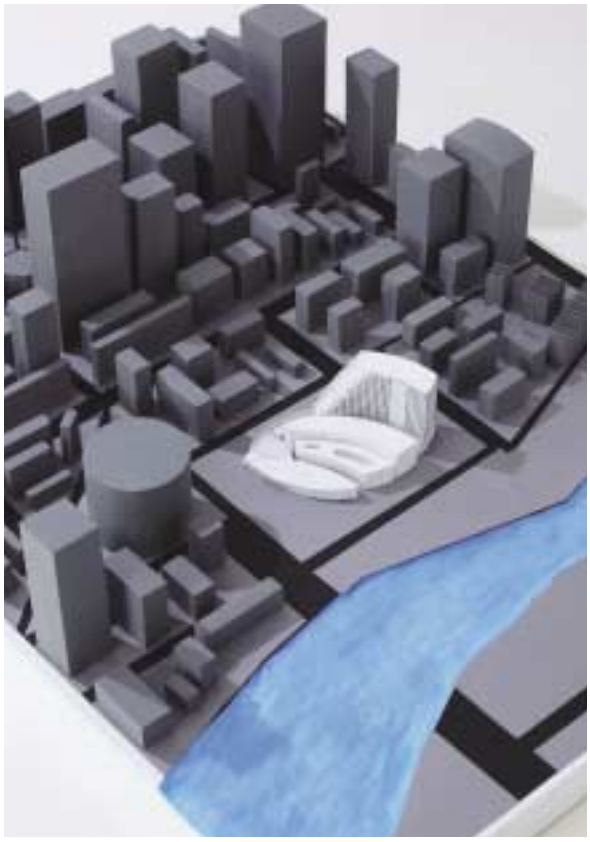
「都会の中の公園」をテーマに木々の茂る室内公園をデザインした。
都会に住む人々、遊びに来た人々たちのcommunication、や癒しの場になればいいと思う。
全体の外観デザイン森の中にジェットコースターが走っている感じ。年月がたち施設全体が植物で覆われ、建物も年をとっていく感じにデザインした。

プライベートシアター「feel」UD×GREEN 5

中山ゼミ

松本 久幸
Hisayuki matsumoto

「映画を観る」ことは好きだが、「映画館で観る」ことを苦手と感じる人はたくさんいます。隣席に人がいると肘をおくことすらためらってしまう密集した座席、また車椅子の人は段差によって座席が限られてしまいます。
「家で観る」にはない、「映画館で観る」ことでしか実感できない感動や思い出をもっとたくさんの人と共有したい。
その一心で、現在よりもさらに多くの人が利用しやすい映画館を提案しました。



オーガニックカフェ「C2 ～つながりを感じるカフェ～」UD×GREEN 6

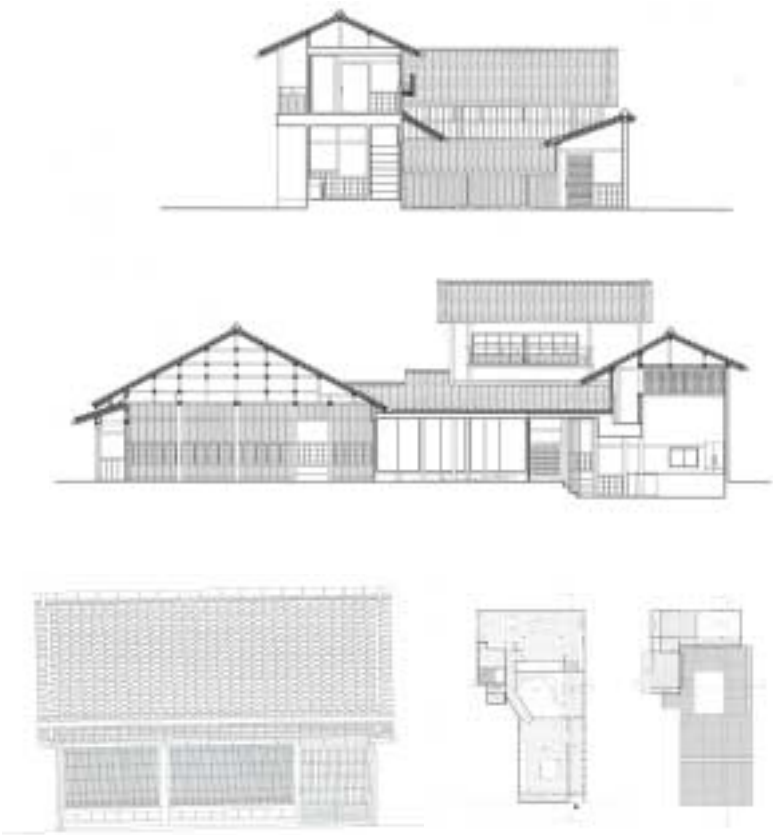
中山ゼミ

安田 陽子
Yoko Yasuda

現代都市部の緑の少なさに着目し、人・自然・建物が調和する事で繋がりを感じ、カフェ空間に自然な人の集まりができ、人と人との繋がりが憩いを生む。そんな新しいカフェ空間を作りたいと思い今回の作品づくりに至りました。そこに全体のコンセプトであるユニバーサルデザイン(UD)と緑(Green)を取り入れました。人々がそれぞれ目的の場所に向かう途中に通行するスペースなので、カフェだけを主体とせず、通路としての役割を持たせました。

三井田ゼミ

町屋の楽器調整師さんの住む家



浅野 真佐直
Masanao Asano

吹奏楽、ブラスバンド、伝統芸能など中・高生の学生やアマチュアなど音楽活動の盛んな奈良の地では驚くほどに楽器関係の店がとても少ないです。
そんな中、奈良の町並みの中に楽器の専門家が店をだしてこの多くの演奏者から見て通いやすい場所があってもいいのではなのかと思います。
そこで、楽器のメンテナスの職人である「楽器調整師さん」が奈良の町で住み、この土地で働いていたらなぁと思い設計をしました。
そこで奈良市元林院町のある「カフェたまき」さんにご協力、店の建物を実際に測量させていただき、図面を起こし、そこから店舗＋住居として住むことができ、仕事場が生活に溶け込み、楽器の健康診断の最良の場として活用できる作品を制作しました。

加藤ゼミ

ENJOY×FASHION ～ファッションと建築のコラボレーションイベント～

有馬 佳江
Yoshie Arima

土谷 早希
Saki Tsuchitani

私達は「ファッション＝楽しい」を伝える新しい企画を提案。それは建築とファッションがコラボレーションした空間作りである。その場にいるだけで「楽しい」と感じる建築やイベント提案。建築編（有馬）は堀江にある「浮かぶ原っぱ」がコンセプトである浮庭橋に関連させ、自然を感じるアパレルショップ＆事務所を設計。ファッション編（土谷）はブランド作成、それに伴い服のデザイン、ファッションショーなどのイベント企画。

日本×アメリカ=球場

三井田ゼミ

上谷 政樹
Masaki Uetani

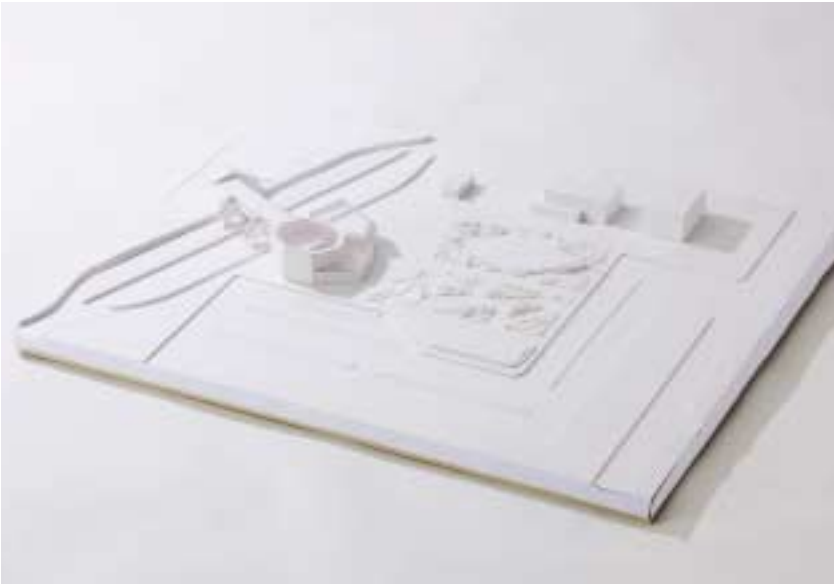
自分の野球愛（高校野球からMLBまで幅広く）から生まれた、日本の野球場とアメリカのボールパークを合体させたいという発想・願望をそのまま形に表してみた。
デザインに関してはその個人個人によって好き嫌いはあるが、ひと目見た時に「こんなボールパークがあったら面白い！」と思ってもらえたら、それだけで良い。
これからも野球を通して、自分自身のポテンシャルを高めていきたい。

近鉄五位堂駅周辺における環境色彩計画

李ゼミ

岡田 彰悟
Syogo Okada

現代の街は駅を中心として発展している。それは鉄道が大勢の人に利用されているからである。それぞれの駅の周辺には、それぞれ電気街や飲食店街など、その街の特色がある。人口の多い住宅街に位置する近鉄五位堂駅に相応しい特色とはどのようなものなのかを考え、快適であり周辺のシンボルとなり得る新たな近鉄五位堂駅を計画する。



三井田ゼミ

新しい街並みの形成

兼田 寛子
Hiroko Kaneda

すべての『人』は個性的だ
住む人の個性は『家』にあらわれ
その集合体が『街』になる

『街』はふれあいの場をもたらし
そこで生まれた『人』と『人』とのつながりは豊かな人間性を創造する

三井田ゼミ

地域と共存する学生街

川中 智基
Tomoki kawanaka

真美ヶ丘６丁目団地では少子高齢化の影響から人口が減少する傾向にある。増加する空室を集合させて学生街を計画し近隣住民と学生を如何に共存させるかを考え学生が街を活性化することを期待する。

随所に設けられたコミュニティスペースや学生の知識、活気を提供することで街の活性化を促し近隣住民と学生の一体化を図る。

ホリデイ・スクール

藤井ゼミ

北野 博輝
Hiroki Kitano

一人っ子が多くなってきている中で、同学年の繋がりはあるが、年令の違う子供同士の繋がりが希薄になって来ている。学年をまたぐ子供たち（小・中・高校生各学年１名ずつ計１２人）がひとつの「家」で共同生活をすることで兄弟や姉妹のような関係を作り、上のものが下の面倒をみて助け合っていく関係をつくり出す「場」を形成した。

衣装制作 ～コンテストへの挑戦～

村田ゼミ

國吉 亜希
Aki Kuniyoshi

この四年間アパレルに関することを学んできました。
また、１年生の時から先輩方がコンテストに向けた素敵な衣装づくりをしている姿を見てきて私も先輩方のような大きな作品作りをしたいと思いました。
そこで京都服飾デザイナー協会主催のコンテストに出場することを決意しました。
今回のコンテストのテーマが「愛のバラード～美しいものに魅せられて」ということだったのでそのイメージで作品作りを行いました。

中山ゼミ

馬見スポーツアクティビティパーク

栗巣 裕貴
Yuki Kurisu

馬見丘陵公園は総計画面積61.3haという広大な土地を持っていながら散歩道や休憩場所があるだけで少しもったいない感じがする。そこで、自然・健康・地域コミュニティという３つのテーマを掲げ、スポーツを中心とした地域コミュニティの核となる場所を作ろうと考え、馬見スポーツアクティビティパークを提案した。年齢や性別に関係なく、ここで出会った人たちと声をかけあい、共にスポーツを楽しめる場所になれば良いと思う。

三井田ゼミ

自立に向け充実された学生寮を

鈴木 理人
Masato Suzuki

現代、少子化に伴い兄弟・姉妹の数も減少しつつある。そんな中で寮という施設は年の近い仲間達と苦楽を共に味わえ、また規律や上下関係を学べる貴重な場所の一つでもある。生活面において制限はあるが、与えられた環境の中で、それぞれの生徒が創意・工夫を生み出し、自立に向けて成長してゆく。自主的または自立的な生活態度をはかり、『生きる』というテーマを掲げ環境をつくる。

変化する収納家具のデザイン

中山ゼミ

髙松 翔太
Syota Takamatsu

常に使用する収納家具の条件に見合ったフォルムを考え、状況によっていろいろな表情を見せることにより驚きや楽しみを与えることを目的とした。
使用時と収納時の変化をみせるために、「引き出す」という動作によって簡単に変化できる家具にした。
机、イス、収納家具の３つの機能を一緒にすることにより省スペース化を考えた。

「増 殖」～進化し続ける現代美術館～

加藤ゼミ

田渕 沙緒里
Saori Tabuchi

僕は種になろう。
芽が出る。枝が伸びる。葉が色づく。
蕾が膨らみ花が咲く。

虫が卵を産み、鳥は巣をつくる。
風を感じ緑を感じ地を踏み感じる。
そして…
種となり土に還る。
こうして僕は何度も生まれ変わり、
成長し続けるのである。

加藤ゼミ

Domus ～集まって住むって楽しいな～

百目鬼 千聖
Chisato Domeki

現在の日本の住宅事情はひどいものである。劣悪な住宅環境に住む若者、住民同士のコミュニティー不足。また、地域性に合わない新築一戸建てやマンション建設の増加。
そんな中、私はコミュニティーが日々欠ける事のない住宅環境で育った。それが長屋である。
同じ地域に住みながらも、全く違う住宅環境が存在する。
そこに、違和感を感じた私は、この差を少しでも埋めたいと想い、この集合住宅（新・長屋）≒コミュニティーを促す住宅を提案する。

三井田ゼミ

Beat Port ―音が躍動する空間―

中澤 友貴
Yuki Nakazawa

卒業設計としてダンスクラブを設計しました。一般的にマイナスイメージが先行しがちな場所ですが、単純に大音量の音楽に包まれるという点においては最適な空間の一つといえます。
利用者は概ね一晩をこの空間で過ごすことになりますが、ほとんどのダンスクラブでは休憩スペースが少ないというのが現状です。
踊る人・休む人の二通りに利用方法を限定しない休憩スペースを含む、快適に過ごすことが出来る空間を提案しました。

金峰閣・ライティングビフォーアフター

加藤ゼミ

中島 亜紗子
Asako Nakajima

店内の１階の照明14個＋展示用1個。計15個の照明シェードを作りました。完成に至るまでには何度もお店に足を運び、オーナーさんと形やデザイン、機能性について話し合いました。そして2月1日に工事をして、1階の照明をすべて取り換えさせていただきました。照明をリニューアルするにあたり気を付けたのは『店内に馴染み、かつ、中華のお店らしさも出す』ということです。元々の店内は、『和』の要素が強く、素朴なイメージでした。そこで、ポイントには中国のイメージカラーである赤を使い、また表面の和紙には、金和紙という金の糸が入った和紙を使用し、縁起の良いデザインにしました。しかし『お店に馴染む』ということもあり、デザインは控えめを心がけました。
また、内側にはプラスチック障子を貼り、補強、耐水、色落ち防止などにも気をつけました。

before

after

IBARAKI PARK

三井田ゼミ

西田 隼也
Junya Nishida

未来に自然を残すことと街中の地下に室内公園をつくり、地上は日常、地下には自然の空間ができるのを目的に考えました。
公園には屋根がかかっているので天候に関係なく、平日にはサラリーマンやOL、休日には家族連れが利用できるようにしました。

村田ゼミ

ロッソ屑に関する研究

久　武志
Takeshi Hisa

涌田 晃照
Akiteru Wakuda

畿央大学のある広陵町は「靴下の町」といわれるように靴下産業が盛んである。私たちは靴下の生産の過程で出る廃材(ロッソ屑)に注目し、そのロッソ屑を有効利用する方法はないかと考えた。
畿央大学でのロッソ屑に関する研究の取り組みは3年目になる。
今年は、前年の研究によって生まれた「ねじり編み」を活かしながら、今までに見られない編み方を考案すると共に、ロッソ屑が発生してからの流れについて調査を進めたいと考えた。

藤井ゼミ

かまくら公園

藤岡 あかね
Akane Fujioka

子供の頃。
お父さんとお母さんが大好き。
でも秘密は持ちたかった。
子供だけの国を作りたかった。
自分たちだけの家が欲しいと思った。
誰にも邪魔されない空間が欲しかった。
大人になって、それを形にできる時が来た。
あの頃の自分が望んでいたことを形にできる時が。
“かまくら”
それは全ての子供たちの思いを詰めた世界。
多くの子供の笑顔が溢れる子供たちの夢の国。

Album ―写真美術館―

藤井ゼミ

藤原 真梨子
Mariko Fujiwara

アルバムをめくるように
わたしの記憶を辿る
あなたの記憶を辿る
だれかの記憶を辿る

そして辿りつく
もう忘れたかもしれないけど
こんなにも美しい瞬間

アルバムのような
建築をつくりたいと思った
懐かしい記憶を辿りついついページを
めくってしまうような―

アルバムそのもののような
建築をつくりたいと思った
しまわれていたそれを手に取り、重みを
感じその色や形が
そっと心に残るような―

てんりアウトレットパーク

三井田ゼミ

丸谷 友哉
Yuya Marutani

様々なショッピングモール、特にアウトレットモールに行くことが大好きで、近年、関西にもたくさん増えてきた。だが、そんな中、奈良には一つもないことに気づき、トレードマークになるようなアウトレットモールを創りたいと考えた。
「奈良らしさ」をだすため、町屋をイメージし、格子、瓦屋根などを取り入れ、あくまで新しいアウトレットモールに仕上げた。配置計画は、車からも電車からも利便性の良い天理市。
そこに「衣・食・住」、兼ね備えた新たなショッピングモールを奈良に計画した。

藤井ゼミ

トタンの幻想

村田 侑理
Yuri Murata

消えてゆく　あのやさしい　稲穂のささやきも
消えてゆく　あのおそろしい　杉木立の唸りも
人はみな　この村を去った
消えてゆく　縁側をすりぬける　あの夏風も
消えてゆく　石垣の山脈をゆく　小さな冒険も
記憶（トタン）は　村中を駆けめぐる
ああ　もう一度　振り向いておくれ
遠ざかる祖母が　悲しげに手を振っている
ああ　もう一度　振り向いておくれ
かつてここに　殿内垣（トノガイト）という村があった

加藤ゼミ

TREE BOX

森内 杏寿
Anjyu Moriuchi

ツリーハウスの魅力に取り付かれて自分なりのツリーハウスをつくりたいと思った。
そして、辿り着いたのはTree boxだった。

海外で見た風景を活かしたいと思った。
海外では公園がまるでカフェのようで人が溢れていた。
公園は子供のもの…勝手に決めつけていた。
固定観念を壊したい。

この2つの想いを合わせた新しい公園をデザインした。
公園らしくない公園を作りたい。

藍染めによる制作 ～タペストリー～

村田ゼミ

山下 達也
Tatsuya Yamashita

昨年の卒業制作を見て種から育てた藍にすごく興味を持った。
先輩から譲られた藍の種を育てていくと同時に幼稚園での藍の栽培活動にも参加し、幼稚園の園児や先生方との交流も深め、常に藍に携わることができた。
さらに藍染めに加え、藍で染めた糸を織り機で織りこむことに発展させた。
糸をかせで染めることや織り機の取り扱いなど難しい作業であったが良い味わいのある作品となった。

衣装制作 ～コンテストへの挑戦～

村田ゼミ

吉井　愛
Ai Yoshii

「愛のバラード」というテーマの元、ドレス制作に取り組んだ。
卒業制作とは４年間の集大成である。
４年間で私が学んだことは「アパレルに関する知識と技術」。
そして「イメージしたものを形にする楽しさ」。
これらを活かすために挑戦したのはデザイナーの登竜門とも言われている『京都服飾デザイナー協会主催　ファッショングランプリコンテスト』だ。
ドレスは、大人びた性格の中にも子どもっぽさが残る猫をイメージした。

三井田ゼミ

gardening

和田 絵里香
Erika Wada

家のベランダが物置状態になっており、和室からの出入りができない、障子さえも開けることができない状態なのでそれを取り除くための計画。取り除くだけではなく、ベランダをより使い易く、自然を感じられる場の提案とする。

加藤ゼミ

kusayane café

和田 千晶
Chiaki Wada

舞台は奈良三条通り
観光客向けの娯楽施設の増加や拡張工事が進行中の一方で、老舗の立ち退きやシーズン外の客足減少、依然目立つテナント募集が情緒の無さを招いています。
そこで提案した「kusayane café」。地元の人が作品を展示できるギャラリースペースをもうけたカフェ。屋上一面に若草山をイメージした芝を敷きました。地上を見下ろすと広がる菜園の成長を見守り収穫を楽しめます。
たまにはゆっくり、青空の下で寝そべってみませんか。

制作風景

論文 thesis

室内空間のイメージに関する研究 ー壁の色と照明の影響ー

佐藤ゼミ

川島 那王子
Naoko Kawashima

Ⅰ. はじめに

LED照明は、消費電力が低くCO_2削減、高耐久性、水銀フリーであり、環境と省エネを兼ね備え、次世代の新たな光源として注目されている。 そこで、本研究では、従来から使われている家庭用照明とLED照明を比較し、壁の色と照明光源の色光の相互作用が室内空間の心理的効果に及ぼす影響について明らかにする。

Ⅱ. 研究方法

1. 標準光源装置を用い、幅551mm、奥行き490mm、高さ390mmの空間を利用して、壁紙の色（White･Yellow･Beige･Red･Green･Blue）が異なる6種のモデルルームを作成する。モデルルームの照明は、天井に設置した照明光源、以下の7種を用いた。
   ＊ 従来照明：白熱電球A、D65蛍光ランプDAY、冷白色蛍光ランプCWF
   ＊ LED照明：白色LED-W、昼光色LED-D、黄色LED-Y、赤色LED-R
   なお、照明光源によって照度が異なるため、開口率を7水準（100%･35%･28%･17%･13%･9%･6%）に設定し、100%以外、6枚のフィルターを作成した。光源下にこれらのフィルター置いて照度を調整する。これらを組み合わせ計294パターンのモデルルーム（壁の色×照明光源×照度）を再現した。
2. 分光放射輝度計(Photo-research製)、色彩照度計（Konica Minolta製）、マルチ分光測色計（Konica Minolta製）を用い、分光放射輝度ならびに分光反射率特性から、モデルルームにおける光学的変化を分析する。
3. モデルルームにおける照明光源の光色と壁材の色が、空間雰囲気や部屋イメージにどのように影響するのか、被験者実験から明らかにする
   （SD法）ー照度400lx

Ⅲ. 結果と結論

1. LED照明の中で、分光特性は異なっていても、それぞれLWはD65、LD はA に色光（色温度）が似ているので室内照明として代用が可能である。LW、LDは発光ダイオードのスペクトルに加え、蛍光物質との相乗効果によって比較的スペクトル幅が広く設計されているためと考える。LY、LR照明は、単色スペクトルのため、家庭用照明としては不向きである。
2. 壁色によって照度は影響される。したがって、部屋の明るさ感を考慮すると、壁の色の明度が明るい方が良い。
3. 照明光源の光色の色みが強ければ強いほど、壁の表面色はその影響を受ける。
4. AやLDの光源を用いたルームは、温かく落ち着いた印象を与え、D65やLWの光源を用いたルームは、明るく現代的な印象を与える。Cの光源は中性的で一般的な印象であった。G壁は和風･古風、W壁は洋風･現代的というように壁の色が大きく影響していた。
5. 照明光源と壁紙の色によって空間の雰囲気を創出するためには快適性や重厚さには照明を、洋風･和風や重厚さのイメージを創り出すには壁の色に特に注意して計画を行うことが重要であるということが明らかになった（図1･図2）。

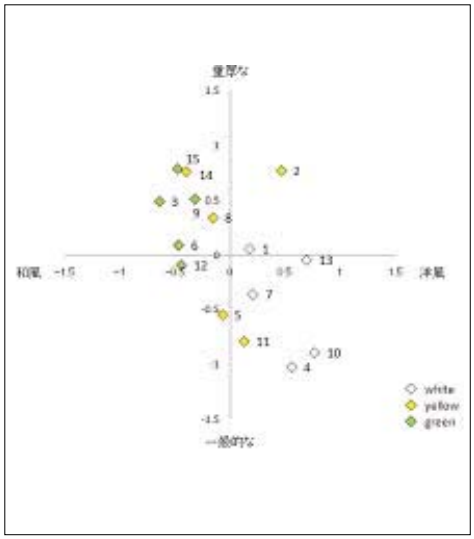


図1

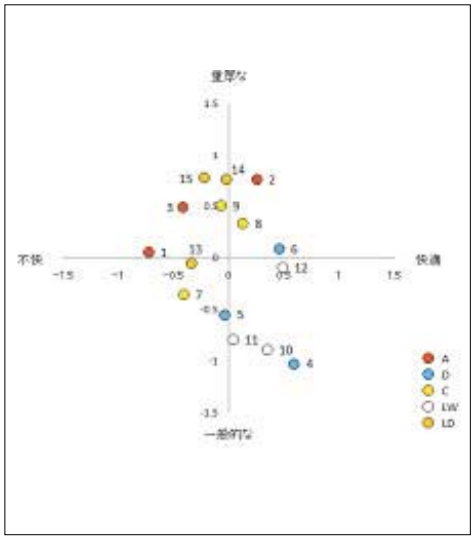


図2

D照明ーG壁（400lx）

LW照明ーW壁（400lx）

村田ゼミ

子どもの生活アンケート調査

岡本 紗也加
Sayaka Okamoto

Ⅰ.研究目的

今、子どもの体力低下は深刻な状況を迎えている。文部科学省が行っている「体力・運動能力調査」によると、子どもの体力・運動能力は、昭和60年ごろから現在まで低下傾向が続いているとされる。子どもの体力の低下は、将来的に国民全体の体力低下につながり、生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下などを引き起こすことが懸念され、社会全体の活力が失われるという事態に発展しかねない。親世代に比べ体力の低下が著しいといわれている現代の子どもたちは一体、どのような状況になっているのだろうか。

今日の社会においては、基本的な生活習慣を身につけることが重要であり、そのためには家庭における保護者の積極的な関わりが不可欠となる。そこで今回、こうした観点から、子どもの生活の場の一つである家庭に焦点を置き、子どもの生活の実態と「子育て」のあり方、具体的には親子関係の現状をとらえようと、保護者と共に日々生活を送っているであろう、幼稚園4歳児・5歳児クラス（4歳児クラスは3・4歳、5歳児クラスは5・6歳）、保育園4歳児・5歳児クラス（4歳児クラスは3・4歳、5歳児クラスは5・6歳）を対象に、子どもの生活に関するアンケート調査を試みた。

子どもたちの心身の健やかな成長のための環境作りに、家庭・幼稚園・保育園がどのように関わっていくのが良いのかを考察していくとともに、幼稚園児・保育園児の生活の相違についても分析していく。

Ⅱ.研究方法

1.調査対象

幼稚園・保育園に通園する4歳児クラス・5歳児クラスの園児を対象とした。

京都府京都市の幼稚園2園（146人（男75女71）、66人（男36女30））、京都府京都市の保育園2園（44人（男女不明）、47人（男27女20））、奈良県生駒市の保育園1園（110人（男53女57））　　計413人

2.調査時期　2009年11月～2010年1月

3.調査方法

上記の幼稚園・保育園に通園する3歳～6歳児の保護者を対象に、選択、記述方式でのアンケート用紙を配布し回答をしてもらい、回収を行った。回収率は83%（配布498部　回収413部）であった。回収したアンケートを幼稚園・保育園別、年齢別に比較し分析する。

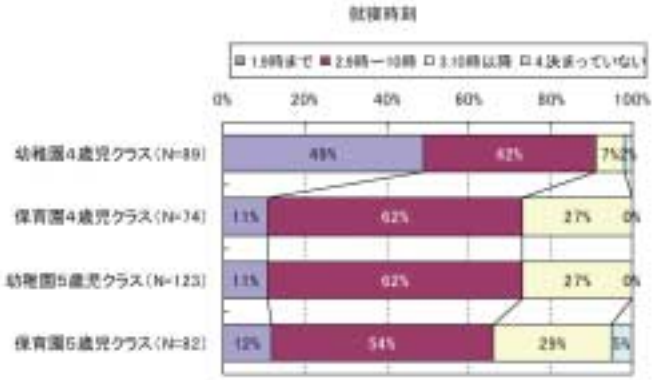
4.調査内容

調査内容は、子どもの日常の生活状況を把握するために、食事、睡眠、着衣、身のまわりのことについて（一人でできるもの）、健康状態についてである。

Ⅲ.結果及び考察

全体の結果として、幼稚園児・保育園児の間には、質問項目によっては相違が見られた。

中でも夜の就寝時刻は、の質問に対する回答で、幼稚園児も保育園児も就寝時刻は9時～10時が42%以上と、多い回答であった。子どもの就寝時刻としては比較的、就寝時刻が遅いように思う。また、幼稚園4歳児クラスでは、9時までに就寝するという回答が49%と多く目立つが、保育園4歳児クラスでは11%と少ない回答で、逆に10時以降に就寝するという回答が27%と、幼稚園4歳児クラスより多く目立つ回答であり、同じ4歳児クラスでも就寝時刻に大きな違いのある回答であった。帰宅時刻との関係、テレビやゲームに費やす時間との関係があるのかもしれない。



Ⅳ.結論

幼稚園・保育園に通園する子どもたちの日常の生活状況を把握するために、食事、睡眠、着衣、身のまわりのことについて（一人でできるもの）、健康状態についての保護者回答によるアンケート調査を行った。

園からの帰宅後、テレビやテレビゲームに費やす時間が2時間を越える子どもが少なくなく、それらが就寝時刻や起床時刻にも影響しているのではないかと考えられる。メディアの普及によって、子どもたちの生活リズムが変わったのである。今回の調査で、夜中10時以降まで起きている子どもは少なくない結果から、背景に「家庭で夜遅くまでテレビを見ている」など、大人の夜型生活が子どもの就寝・睡眠時刻に影響を及ぼしていると分析した。生活リズムが不規則で睡眠不足になると、ホルモンバランスや自律神経が乱れることもあり、子どもの健康への悪循環が懸念される。

最近、宮城県が毎月第3日曜日を「ノーテレビデー」の取り組みとしてともかく1日、可能であれば1週間、テレビもビデオもゲームもない生活に挑戦しようと各家庭に呼びかけ展開した結果、変化の兆しが見られた。このよう取り組みが出来れば過度なテレビ視聴を押さえることは実現可能であり、睡眠不足もなくなると考えられる。

今後このような取り組みは家庭ではもちろん、園からどういった対応をとるべきか、意識づけのきっかけになるのではないだろうか。

室内環境と居住者のライフスタイル・自覚症状の実態に関する研究

東ゼミ

左古 なつみ
Natsumi Sako

中辻 麻衣子
Maiko Nakatsuji

【はじめに】

本論文では、室内化学物質に対する規制が、室内で知覚される自覚症状や室内環境に与える影響を考察することを目的とし、内装仕様の異なる居室を対象にアンケート調査と室内環境測定を実施し両者の関連性について検討した。

【研究方法】

実態調査（アンケート調査）

・調査対象者:県内の大学学生寮に居住する女子大学生

・調査方法および調査期間 :留置自記法による質問紙調査

従来仕様寮（1996～1997年竣工）:

184部配布70部回収（回収率38.0% ）

化学物質低減化仕様寮（2002年改修）:

72部配布29部回収（回収率40.3%）

・調査項目:シックハウス様の自覚症状の有無・住まい方（換気・掃除頻度・家具選定等）・生活習慣・アレルギー等

・調査時期:2009年7月3日配布　8日・14日回収

実測調査（環境測定）

・測定対象:アンケート対象者から協力を得た7室（従来仕様4室、低減化仕様3室）

・測定項目:ホルムアルデヒド濃度（DNPH-Passive法）、温度、相対湿度

・生活行動記録アンケート:窓開放率、換気扇作動率、在室時間、睡眠時間、エアコンの使用状況等

・測定時期:2009年9月28～29日

・測定条件:24時間平均および7時間平均濃度とした。

【結果・考察】

対象者の年齢は、19～22歳が9割近くを占め、在室時間は11～13時間が約4割、平均睡眠時間は約7時間であった。

Fig.1に仕様別の自覚症状申告率を示す。13症状中9症状で従来仕様の申告率が高かった。特に「異臭刺激臭」や「目の刺激」の申告率の違いは、低減化仕様の建材に含まれる化学物質が少ないためと推察された。

居住者の住まい方・ライフスタイルでは、夜間の窓開放状況は低層階の開放時間が短く、症状の申告率が高い傾向にあった。臭いや粘膜刺激症状は在室時間やシックハウスの認知度と、食事バランスや居室向きは疲れやすいなどの心身症状との関連性があった。シックハウスの認知は換気行動を促す傾向がみられた。家具の選定では、購入時に材質を気に掛けるという回答は僅かであり、建材に比べて家具の安全性に対する意識の低さがうかがえた。また、アレルギー体質の人の症状申告率は有意に高く、個人の体質により一層の配慮を要すると考えられた。

室内環境測定では、室温は24～28℃であり、今回の測定では建築・改修後、年数が経過していたため、室内ホルムアルデヒド濃度は指針値である0.08ppmを超えなかった。しかし、同じ仕様の居室においても、窓開放時間や生活行為により、各室の濃度には差があった。そこで、仕様別に湿度50%とし、15－40℃の範囲における濃度予測した結果をFig.2に示す。温度が高くなるにつれて仕様間の差は広がり、特に高温では仕様の違いによる影響に加え、窓開放率の影響が大きくなると考えられた。

【まとめ】

建材の仕様の違いは室内ホルムアルデヒド濃度・自覚症状申告率ともに影響が大きく、その選択の重要性が確認された。窓開放などの換気行為だけでなく、例えば食生活や食習慣は生活リズムを整えており、症状の申告率の低減に寄与していた。申告率の低減には室内環境・ライフスタイル・体質・情報など、様々な視点からの対策が求められる。

【謝辞】

アンケート・測定に協力頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

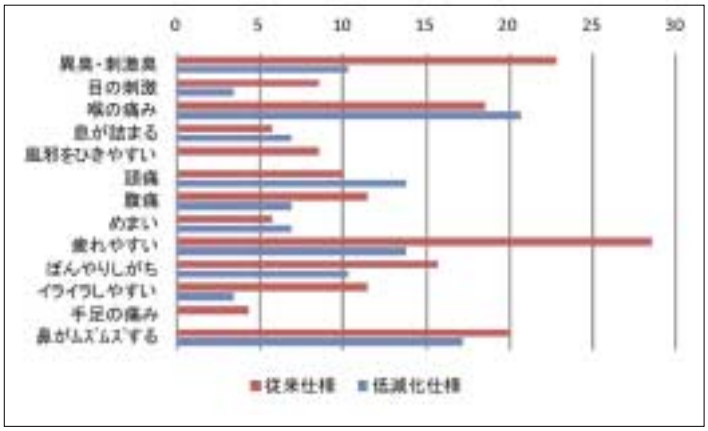


Fig.1　仕様別の自覚症状申告率

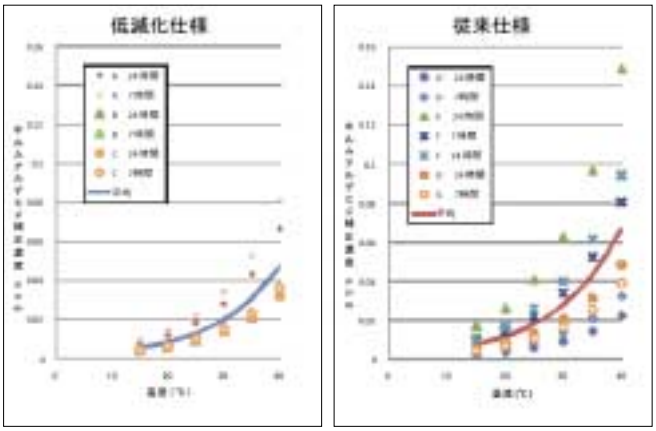


Fig.2　仕様別各部屋のホルムアルデヒド濃度予測値

斉藤ゼミ

道のユニバーサルデザインに関する調査研究 ー橿原市八木町の実地調査ー

田仲 正人
Masahito Tanaka

鴇田 厚作
Kosaku Tokita

山岡 徹也
Tetsuya Yamaoka

1. はじめに

平成18年「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」（バリアフリー新法）が施行され、建物、公共交通機関、道路等のバリアフリーが進みつつある。今回、橿原市移動等円滑化基本構想策定協議会に公募代表委員として参加させていただく機会を得た。本協議会における意見、方法を参考にし、本研究では、奈良県橿原市八木町付近の生活道路を対象地域とし改善につながる提案を行うことを目的とする。

2.研究方法

道のユニバーサルデザイン[注1)]の実態を把握するため西日本の人口十万人以上の市町村（99市町村）を対象に郵送調査を実施した。（53市町村から回答を得た。回収率54%）その中から選定した5ヶ所7事例の先進事例について実地見学を行った後、橿原市八木町の実測調査を実施した。

3.結果・考察

郵送調査の結果、①幹線道路の実施は28市町村、生活道路は42市町村（実施内容は図1）②歩道の確保に際し、車線減少や車道幅員の減少の方法が取られている③生活道路は住民要望から始まることが多く、結果として交通事故の減少に繋がる事などが理解できた。

先進事例調査では役所の担当者の方へのヒアリングから①車道、歩道の間に車止めがなければ歩道への車両の乗り上げや走行する危険があること②歩道はメンテナンスが重要であること③何より車両運転者も含め地域住民の理解が重要であること等が理解できた。

橿原市八木町の実測調査の結果を地図1に示す。八木町は、古くからの宿場町であり築300年近く経つ住宅が現存し、また伊勢街道や中ツ道が今回対象地域の中に含まれる。観光客も多く訪れ、徒歩での散策を楽しんでいる。また、対象地域に在る高校の生徒や地域住民の自転車利用も多い。一方、伊勢街道に並行する国道24号の渋滞から、抜け道として利用する車両が多く見られ、スピードを出し走行している実態が見られた。生活道路の整備の前提として周辺の幹線道路の車両の円滑な流れが必至であるが、本研究では、生活道路に絞って改善案を示した。

地図1　道路幅員と電柱

問題点

- 道路幅員が狭い。
- 路面が凸凹していて、歩きにくい。
- 歩道と車道が差別化されていない。
- 電柱が多い。　•通過車両が多い
- 交差点では死角が多い。
- グレーチングの種類が統一されていない。
- グレーチングがないところがある。
- 案内板やサインが少ない。
- 水路が汚い。
- 視覚障害者用誘導ブロックがない。
- 観光スポットがあるが一見しただけではわかりにくい。
- 路地が入り組んでいて迷う恐れがある。

4.まとめ

以下に改善案を示すことによりまとめとする。

①歩行者専用道路（以下、歩道と略す）の確保

電柱の地中化および側溝改修で歩道を確保する。街灯は車止めを併用。幅員4m道路は片側に、7m道路は両側に歩道を設置。路面は滑りにくい透水性コンクリートで舗装する。

②歩車自転車共存道路の設置

歩道以外の部分を歩行者、自転車、車両共存道路とする。道路幅員に関わらず、一方通行とする。

③車両の制限および速度制限

車両制限（地域住民所有の車両および許可車両のみの運行）および通勤、通学時間帯の通行止めの可能性を探る。交差点付近にハンプを設置さらにミラーの設置も望ましい。幅員7m道路にはクランクを設置する。

④視覚障がい者誘導ブロックの設置

進行方向を示す直線の溝を掘った「ゴム製の誘導ブロック」[注2)]（幅300mm）を敷設する。

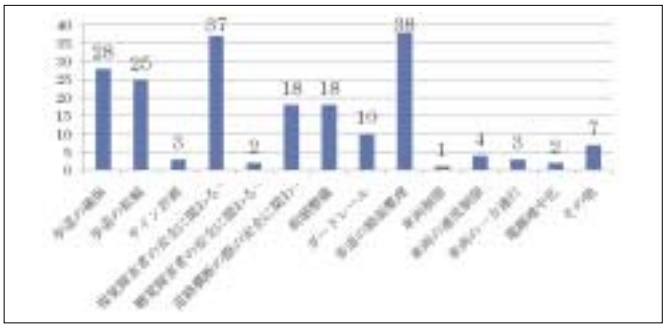
⑤その他

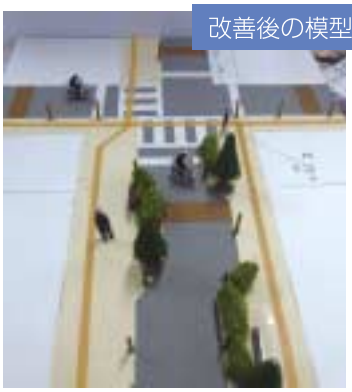
クランクの設置により生まれる緩衝帯スペースに植栽、ベンチ、周辺地図、案内板等を設置する。

⑥路地・水路の整備により、散策に適した遊歩道を作る。

以上、改善案を示したが、生活道路の改善に関しては、その後の運用においても地域住民の理解が重要であり、住民参加のもとに進められることがもっとも大切である。

図1:ユニバーサルデザインの施行内容（生活道路）※複数回答





注1）バリアフリーは物理的解決の印象が強いため、利用者のモラルやこころのバリアフリーの重要性を鑑み、本研究は道のユニバーサルデザインとした。

注2）「フラット型視覚障害者用横断歩道誘導帯の開発研究～弾性素材を用いた横断歩道誘導帯の有効性の検証～」
著者:福家 輔　太田 篤史
日本建築学会大会学術講演梗概集
2008月9月　P695-696

高齢者向け優良賃貸住宅の入居者の生活に関する調査研究

斉藤ゼミ

田森 啓祐
Keisuke Tamori

西山 悟史
Satoshi Nishiyama

1.はじめに

高齢者世帯が、安心して居住できる賃貸住宅の供給を促進するために、平成10年に「高齢者向け優良賃貸住宅制度（以下、高優賃と略す）」がスタートした。平成21年現在、近畿6府県の高優賃は84件であり、その内の半数以上が大阪府にある。

本研究は、大阪府下の高優賃を対象とし、その相違点を把握するとともに、高優賃入居者の属性および生活実態から、望ましい高優賃のあり方を検討することを目的とする。

2.研究方法

大阪府の高優賃37件の募集要項を入手し、主に共用空間[1)]の配置により4タイプ[2)]に分類した。各タイプから抽出し、見学の承諾が得られた7事例の見学および管理者へのヒアリングを実施した。その内、管理者から承諾の得られた4事例の入居者へのヒアリング調査を行った。

3.結果・考察

7件の高優賃をヒアリング調査した結果、共用空間が設置されている高優賃ではその管理方法により開放型、中間型、閉鎖型[3)]に分類できた。中間型、閉鎖型の共用空間はほとんど利用されておらず、開放型で、囲み型やガラス張りなどで共用空間の外部から中の様子が窺える共用空間は利用が多いことが分かった。また①緊急時通報システム作動時の対応②管理人の有無や勤務時間③生活援助員（LSA）の有無等、ソフト面のサポートに相違のあることを把握した。

次に4件の高優賃83名の方にアンケート調査にご協力いただいた。調査対象者の属性は、性別構成は女性が73.5%と多く、年齢構成は75歳以上の後期高齢者が70%近くを占める。7:3で独居が夫婦入居を上回る。身体状況を要介護認定の側面よりみると、「自立」が65%ともっとも高い。しかし社会福祉法人が運営する高優賃では、介護認定を受けている人の割合が高い傾向を示す。入居理由は、「家賃補助があるから」「バリアフリーが魅力」など高優賃の特徴的な事柄を挙げている人が多い。

共用空間の利用内容を尋ねた。高優賃Aでは、サークル活動やそば打ち大会、お好み焼きパーティー等に利用され、高優賃Cは、配食サービス利用時に、高優賃Dは、自治会活動、食事会等に利用されている。高優賃B（閉鎖型）は、共用空間を利用したことがない人が8割近くを占める。

表1　調査高優賃の概要　　入居者へのヒアリングを行った高優賃

	全戸数	管理主体	管理人	常駐の有無	LSA	共用空間の区分
事例A	22	民間企業	○	Mo～FTo	○	独立型・開放型
事例B	40	民間企業	○	Mo～SDo	×	並列型・閉鎖型
事例C	24	福祉法人	○	24時間	○	並列型・開放型
事例D	14	福祉法人	○	Mo～FMo	×	囲み型・開放型
事例E	19	民間企業	×		×	並列型・中間型
事例F	44	民間企業	○	Mo～FTo	×	並列型・開放型
事例G	32	民間企業	×		×	なし

※事例Dは介護福祉士がLSAの役割を担う

共用空間の利用頻度と、高優賃内の友人の有無は関連し、利用頻度が高い人ほど友人がいると回答する人の割合が高く、共用空間で行われている活動や行事等への参加は友人の有無に寄与しているものと推察される。

高優賃内での友人の有無を男女別にみると、男性は女性に比べ「友人はいない」と答えている割合が高く、つきあいの程度にも希薄さが伺える。男性を家族形態別に分類すると、独居は夫婦入居よりも「友人はいない」と答える人が多く、独居男性に対する何らかの支援が必要なのではないかと考えられる。

困った時に誰を頼るかの質問では、子どもを含む親族と並び、管理人・LSAの役割が大きい。先に述べたサークル活動や自治会活動も入居者の自発的な活動というよりもLSAの働きかけによるものが大きく、高優賃におけるLSAの存在は生活支援の側面で大きいものであると示唆される。

4.まとめ

限られた事例数ではあるが、高優賃ごとの相違点を把握することができた。共用空間の管理および管理人やLSAの配備等、特にソフト面の整備が入居者の生活に関わることが示唆された。

1）高優賃では共用空間の設置に関する建設補助金が交付される
2）並列型:居室と連続して設置されている共用空間
　独立型:その階の大部分が共用空間で居室と隣接していない共用部分
　囲み型:その階の中心が共用空間でその周りに居室がある
　共用空間がない
3）開放型:ドアがない。もしくは施錠されていない
　中間型:通常施錠されており、入居者全員が鍵を所有し自由に使える
　閉鎖型:通常施錠されており、使用に許可が必要

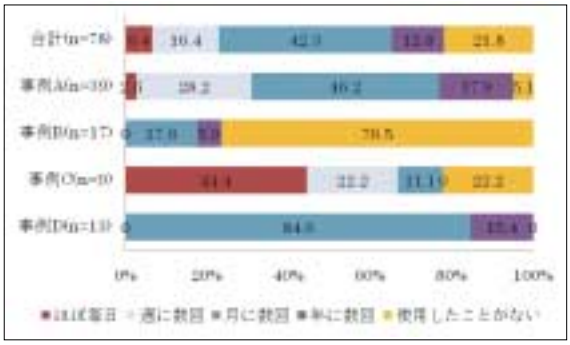


図1　高優賃別にみた共用空間の利用頻度

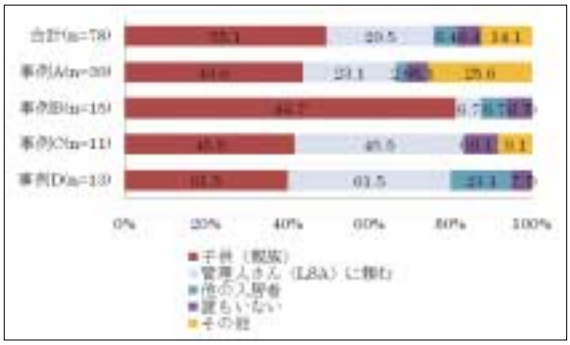


図2　困った時に頼る相手（複数回答）

金敷ゼミ

直接プライミングに及ぼす制限時間の効果について

水本 遼太郎
Ryotaro Mizumoto

問題

直接プライミング効果とは、先行する情報の処理によって、後続の同じ情報についての処理が促進されることである（太田、1991）。直接プライミング効果を測定する課題の1つに、実験参加者に虫食い状になった単語のフラグマント（e.g., ほ□せん□）を呈示して、単語の完成（ほうせんか）を求める、単語完成テストがある。実験参加者に対して、単語完成テスト前に単語が呈示されている場合には、単語が呈示されていない場合（未学習条件）よりも単語の完成率が高くなる。このテストの場合、単語完成率の増加が、先行情報の呈示によってもたらされることをもって、“直接プライミング効果”と呼ぶのである。

単語完成テストにおいては、呈示される情報の知覚的・物理的特徴が非常に重要な要因であり、学習時とテスト時とにおけるデータ駆動型処理の内容が一致しているかどうかに、その成績がおおきく依存すると報告されている。たとえば藤田（1992）は、視覚呈示される文字情報の物理的特徴について学習時とテスト時とで一致しているか否かの効果を、単語完成テスト時の回答制限時間との関係で明らかにしようとした。彼の結果においては、回答制限時間が短い場合に、学習ーテスト間で物理的特徴が一致している場合の単語完成率が一致していない場合のそれを上回った。これは,制限時間が短い場合には、データ駆動型処理に依存しがちな情報処理が行われるゆえに、学習ーテスト間での情報の物理的特徴の一致、およびそれに伴ったデータ駆動型処理の一致が、単語完成率を高めたことを示している。

本研究では、この結果をふまえて、学習時・テスト時とも情報を同時呈示した場合にも直接プライミング効果が生じるかどうか、また、回答制限時間との関係で学習ーテスト間における情報の物理的特徴の一致効果が変わるかどうかを明らかにすることが目的であった。物理的特徴として操作されたのは、文字情報のレイアウト要因（縦書き・横書き）、および、文字情報のかな表記要因（ひらがな・カタカナ）であった。

実験

合計7つの実験を行った.それらは以下の通りであった。

実験1a:スライド2枚呈示・直後テスト・制限時間なし
実験1b:スライド2枚呈示・直後にテスト・制限時間1枚あたり4分
実験2a:スライド2枚呈示・1週間後テスト・制限時間なし
実験2b:スライド2枚呈示・1週間後テスト・
　　制限時間1枚あたり4分
実験3a:スライド1枚呈示・4週間後テスト・制限時間なし
実験3b:スライド1枚呈示・4週間後テスト・制限時間4分
実験4:スライド1枚呈示・直後テスト・制限時間4分

図1　スライド2枚呈示の例

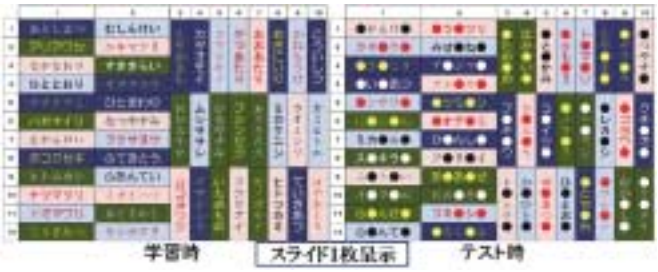


図2　スライド1枚呈示の例

結果

結果の骨子は表1に示す。すなわち、(1) 同時呈示条件下においても、未学習語との関係ではおおむね直接プライミング効果が見られる;(2) 直接プライミング効果の量は、遅延時間の有無に依存している;(3) レイアウト一致の効果は、スライドの枚数に依存している;(4) かな表記一致の効果は、スライドの枚数とテスト時の制限時間に依存している;(5) 実験2bは、レイアウト・かな表記のどちらかが一致している場合にプライミング効果が大きくなり、どちらも一致している場合には成績が低下した。

表1　実験結果の骨子

実験2bにおいて、レイアウト一致・かな表記一致の条件で成績低下したということは、2系統のデータ駆動型処理に葛藤が生じる場合がありうることを示している。本研究におけるスライド1枚の条件下ではこの現象を再現できなかったが、今後はスライド1枚でも再現されるのかどうかを明らかにすることが求められよう。

子どもの自然体験に関する研究 ―蚕の飼育、地域の力と共に―

村田ゼミ

和久田 直彦
Naohiko Wakuda

はじめに

昨今の子どもは、人間の原体験とも言うべき自然体験が不足していると言われている。私は大学在学中YMCAという場で子ども達と野外活動を行う機会があり、5泊6日お風呂にも入らずに自分達でテントを建て、炊事を行い、川の水で洗濯し、帰る頃には見違えるほど逞しくなる子どもを沢山見てきた。そこで自然体験の重要性を肌で感じ、このテーマを行うことにした。今回は、子ども達に自然体験の場を設ける取り組みを大和高原文化の会の方々と連携して行い、テーマを「子どもの地域と歴史を学ぶものづくり体験活動」とした。今回の題材は天然繊維の絹糸を吐く蛾の幼虫「蚕」である。蚕を選んだ理由は以下のようである。①40日前後で卵～繭～成虫となることから短期間ですべてのサイクルが観察可能。②その繭からは絹という身近に使われる素材がとれ、加工することが可能。③大和高原では昔、伝統産業とし養蚕が盛んであったことがあり、この養蚕に触れることで日本古来の文化も学べるなど地域の方から、子ども達への伝承の重要性が挙げられている。本研究では昔養蚕が盛んであった大和高原の山添村で、その地域に住む小学生と共に蚕の飼育を行い、子ども達の気付き学ぶ姿を観察する。そして、「自然」「地域」「歴史」の3つをキーワードに自然体験の可能性を研究したものである。

研究の目的

今日の自然体験の希薄さの背景を探り、「自然」「地域」「歴史」に焦点を合わせた自然体験の実施を示し、この学習が子どもにどのような気づきをもたらしたかについて考察を行う。

研究の方法

≪年間計画≫

月	5月	7月	8月	10月	11月
活動内容	蚕の飼育 約20頭	繊維・衣服についての授業を実施	8月8日 幼虫の体験活動① 蚕の飼育 約500頭	10月17日 繭の体験活動③	11月3日 展山添村まつり 発表展示
		7月22日 （1,2年生）			
	募集要項作成	7月23日 （3,4年生）	8月25日 繭の体験活動②		
		7月24日 （5,6年生）			

山添村立山添小学校の児童対象に「蚕」や「山添村の養蚕の歴史」についての授業を行うことで、蚕に対する興味付けを行った。この講義後に「地域の文化と歴史を学ぶものづくり体験活動」の要項を配り、参加者を募った。また授業についてのアンケートも配布し、授業前と授業後でどのような変化があったかを考察した。体験活動は「幼虫の体験活動」と「繭の体験活動」と「繭によるものづくり」の3回シリーズで行った。またこれらの体験活動でアンケートを配布し回答の考察を行った。

結果

今回の体験で勉強になったと答える子どもが総じて90%を超えていたことから十分成果があったといえる。1,2年生に関しては蚕のことを知らなかったと答えた児童が55%いたが、今回体験したことで勉強できたと答える児童が94%、もっと知りたいと答えた児童が78%いたことから知るというきっかけが興味に繋がったといえる。また、「山･川･花･虫などの自然は好きですか?」という質問に対して、1,2年生が78%、3,4年生が85%、5,6年生が63%と、高学年が少ない結果であった。感想では学年が上がるにつれて、「カイコから糸をとるところはかわいそうだと思いました。」「なんだかカイコがかわいそうなかんじがした。」など、蚕の目線で考えたものが出てきた。また、蚕の歴史を知れたことを良かったと評価する児童が多数見受けられた。

結びに

私たちの生活は自然と関係のないところで成り立っているように考えがちであるが、例えば私達が身にまとう衣服は植物、石油、そして今回の教材である蚕のような生物も原料になっている。そして蚕は石油や植物とは違い、目の前で動く「命」として捉えることが出来る。蚕の命により私達の衣服が作られ、私達の生活は、命をいただくことにより成り立っているということを学ぶ意義は大きい。本研究では「生きた姿を見ること」、「その背景にある歴史を学べる点」、「地域の協力がありこの機会を持てた点」の学習効果を得ることが出来た。地域の方々も蚕の飼育に協力をして下さり、昔をなつかしむと共に現代の子どもの現状を知り、地域の力により子どもを支えたいという意見を頂いたことも大きな成果と言える。そして、今回の実施は体験的であるが、本来自然との関わりは継続的であり、それに加えて「経済的」「人員的」負担があるのも確かである。また、その環境を整えることは重要であり、支援が必要であることも明らかであった。地域のコミュニティが薄まりつつある中、将来的な展望を踏まえつつ広く連携し合い、社会全体で児童生徒の育成を実施していくことが今必要であると考えられた。

二〇〇九年度卒業研究・作品展

幾央大学
健康科学部健康生活学科　人間環境デザイン専攻

第4回 卒業研究講評会

全体講評会：2月15日　10:00～16:00

選抜講評会：2月16日　10:00～16:30

会　　場：幾央大学　L101教室

選抜発表者：有馬佳江
土谷早希
片山光世
兼田寛子
川島那王子
川中智基
國吉亜希
左古なつみ
中辻麻衣子
高貝憲平
田渕沙緒里
百目鬼千聖
中島亜紗子
久　武志
涌田晃照
廣岡　学
深井美帆
藤原真梨子
外園真士
村田侑理
森内杏寿
吉井　愛

学長賞

廣岡　学

優秀賞

片山光世
川島那王子
高貝憲平
深井美帆
外園真士

講 評

君たちの卒業制作・研究を見て、私は感動しています。

取り掛かりが遅く、できあがるだろうかと心配していたのですが、君たちは持てる力を十分に発揮して、仕上げました。友達と協力し合い、切磋琢磨して、連日夜遅くまで頑張りました。「火事場の〇〇力」とはよく言ったものです。追い込まれて、初めて、思った以上に頑張れる自分の姿に驚いた人も多いでしょう。頑張る中で、「物作りが好きなこと」、「どうしてもこだわってしまうこと」など、自分の新たな一面を発見した人もいるでしょう。あるいは、友達との絆を再確認した人もいるでしょう。

一方、「もう少し、頑張ればよかった」と悔いを残している人もいるに違いありません。その人たちは、社会に出れば次の機会は必ずあります。やり残したことは、その時完全燃焼させてください。

学生諸君、君たちはよく頑張った。誇りに胸を張って、これからの道を進んでください。そして、もしも迷った時には、この作品集を開いてください。ここには君たちの大学4年間の思いが、同じ釜の飯を食った思い出がつまっているのだから。

最後に、大学4年間にわたって、学生たちを支えてくださったご両親様、ご家族の皆様に感謝いたします。

三井田 康記
人間環境デザイン学科長

4回目の卒業研究発表が終わりました。本年は、両極化の傾向が見られましたが、非常に優秀な研究、丁寧な作品も多く、優秀賞の選定には悩みました。多様なプレゼンのスタイルにも目を見張りました。緊張感の中にも笑いの絶えない楽しい研究発表会でしたね。

私は、論文指導をとおしてゼミ生と関わりました。調査依頼の交渉、依頼文の作成、ヒアリング調査等の実施、データの処理や分析、もちろん文章力も問われます。計画的かつ地道な取り組みが要求されます。どれかひとつに対してでも、自信に繋げてくれればと願います。社会人になった皆さんにお会いできることを楽しみにしています。

斉藤 功子
人間環境デザイン学科主任

今年度2009年12月、COP 15（気候変動枠組み条約第15回締約国会議）がストックホルムで開催されました。「ヒトと環境」をKey words に勉強してきた皆さん方にとっては、4年間の集大成としての卒業制作・論文を考える上に、これらの全地球的国際活動は重要なテーマになったのではないでしょうか。実際、皆さん方が取り組まれた課題には、「環境」や「エコ」を取り上げた多くの作品がありました。そして、同時に「UD」「コミュニケーション」といった「ヒト」への優しさや思いやりをコンセプトにした全作品（製作・論文）の中に、4年間勉強された「徳」と「知」力が形をもった「美」の表現として提案されていました。建学の精神「徳」「知」「美」にはとどまるところはありません。これからの人生、益々研鑽を積まれ、活躍されることをお祈りしています。

佐藤 昌子

頑張った君へ。たとえ結果は出せなかったとしても、それを気にする必要ありません。力の限りを尽くしたことこそ重要なのだから。しかし、満足はせず、もう一度振り返ってみて下さい。独りよがりは無かったか、充分考え尽くせたか、心を打つ作品ができたか、と。もう今回の作品自体に手を加える機会はないかも知れませんが、その反省こそが、これからの君のものづくりの指標になります。

頑張れなかった君へ。うなだれる必要はありません。これは、大学生活最後の機会ではあっても人生最後の機会では無いのだから。しかし、君自身のこれからのために、受けた批判は真摯に受け止め心に留めておいて下さい。結局何とかなったのは今回が最後で、社会は言い訳を許してはくれません。

何れの諸君も皆、自信を持ってこれからの人生を生きて下さい。取り柄の無い人間など居ません。そして、神は自分を信じる者にこそ力を与えるのです。

藤井 豊史

中間発表の時には、無事に制作や論文が仕上がるのか心配でしたが、各自の努力で期限までに仕上げ、教員の質疑に対し真摯に答える姿に四年間の成長を感じました。二日目の発表には斬新な工夫を凝らしたプレゼンテーションもあれば、シンプルに作品や研究成果の表現を試みるなど、発表手法にも個性がみられました。これまでの過程を思い出し、込み上げるものを感じた人もいましたね。卒業研究は、自分のなかのシフトを全開にできた人にも、そうでなかった人にも、これから社会へ羽ばたくみなさんの原点となる貴重な経験になったはずです。経験を生かし、学び、感動する気持ちを忘れずに、それぞれの人生をよく生きてほしいと心より願っています。

東 実千代

手前味噌ですが、「1979都市商店」これは僕の卒業設計のタイトル。1979は忘れもしません、私の大学卒業年度です。もう30年も前のことですが、未だにそのテーマを今日まで引きずっている自分がいます。あなたたちも同様2010年と作品タイトルは脳裏にこびりついていくことに違いない。

そもそも卒業研究は自分にとって何だったのか?そして何のためにあったのか?その先に見えてくるものとは・・・発表ができなかった人、賞からもれた人、あまり評価されなかった人の中にも見逃した凄い原石があったかもしれない。要は卒業研究に全力でぶつかったのかどうか、思いっきり燃焼したのかどうかが問題だ。これから社会に羽ばたいていかれ、今までとは全く違った環境に放り込まれるわけです。その時に、たとえ困難なことに遭われてもこの卒業制作を思いだし、この時のように真正面に向き合って前進してほしいと願っております。逃げては駄目です。そして一緒に共に苦労した仲間を思い出してほしい。卒業研究は終わりではなく、青春のはじまりなのです。

加藤 信喜

コンセプトから作ってさ、トップダウンでデザインしてく、コンセプトを製作物に徹底させてくやり方って、たぶんとっても難しいんだと思うよ。言葉（コンセプト）って強烈な拘束力あるからね。そりゃあ、トップダウンでデザインする方がウケはいいやね。“わたし”までデザインして感情を引っかける洗練されたやり方もアリだよね。そうやって、日々の生活や就職活動乗り切ってきたんだろうしね。でもね、作品見ててさ、そのやり方が向いてないかも……残念だなと感じることが、毎年たびたびあるんだ。4年間つきあってきてさ、ボクとか、他人から言葉を押しつけられるのはイヤがるくせに、なんだってあなたは、あなた自身の言葉との関係で、自分で自分のクビを締めてるの？デザインは、ボクたち人類の生活の一部だし、かつてもそうしていたし、これからもそうし続けると思う。でも、言葉から出発したら、結局言葉のデザインにしかならないんじゃないかな？

金敷 大之

今年度の作品や論文の中には「時間をかけて取り組んだ力作」が多く見られました。造っては壊し、壊しては造るこの繰り返しがその研究の厚みになってくるのでしょう。4回生には「いつ何時も自分の研究のことを考えなさい」と話しますが、すべてのものには限りがあります。優先順位を決めて、時間を有効に使う。すると素晴らしい結果が生まれる。是非、今すべきことに時間を使いこれからの人生を有意義なものにして下さい。皆さんのご活躍をお祈りしています。

村田 浩子

卒業制作とは、自分の仮説を検証する作業だと思います。もちろん仮説は根拠を示す必要があります。そして、その仮説が正しいのかどうかを確かめることが卒業制作の大きな目的なのです。根拠のない仮説では、すぐにボロが出ます。本当なら、昨年11月の中間発表会において仮説が示され、以後はその検証のための制作に入るというのが望ましいのですが、最後まで遅れに遅れて仮説の提案だけに終わったのではないかと思われる作品も中にはありました。仮説を提案することだけに時間がかかってしまい、仮説の検証がほとんどできなかった人は、作品に自信を持てなくなることが多く、逆に、検証をしっかり行った人は作品に自信を持てると思います。それが、作品の持つパワーの差となって表れるのだと僕は考えます。斬新なデザインの仮説は華やかに見えるが、そのデザインが果たして正しいのかどうかを、たとえば実寸だとどう感じるのか、実際のデザイン効果はどうなのかを一生懸命に考えた人の作品はリアリティがあり迫力を感じるはずです。今回はアート系の作品が多かったですが、そうした作品についても同じことが言えると思います。

中山 順

4年間学んだことを一つの卒業研究として仕上げるまでにはいろいろと苦労があったかと思います。就職活動をしながらテーマを決め、調査、打ち合わせなどの準備期間から一つの「かたち」にする作業まで、やり遂げた達成感、満足感は今やしっかりと身についているはずです。苦労した時間も楽しかった時間もそれぞれ素敵な思い出となり、今後、この貴重な経験を社会人のお仕事にしっかりと生かしてほしいと願っています。今後のご活躍を期待しています。特に、1組の皆さん、陰ながら応援しています。担任として忘れられない4年間でした。

李 沅貞

卒業研究おつかれさまでした。ひとつひとつ作品を見ている間、4年間のがんばっていた姿を思い出していました。失礼だけど、こんなことができるようになってる！とか逆にこれどうやって作ったの？とか、見ていて本当に楽しかったです。本当に4年間よくがんばったと思います。

卒業研究は自分の思いの集大成です。これが自分です、と言ってるものです。だから自分を売るのってなかなか大変なことで、しかも短時間で伝えるなんて器用な人はいなかったと思います。でも自分で信じた道を課題として全うしている姿を見て自分がみんなにどれだけ共に携えることができたのだろうって思いました。4年間って長いようで短いと、こんなに思ったことははじめてでした。この成長を胸張って社会でぜひ発揮してください。

会う機会は少なくなるけれど、卒業してからも何かのときに力になれるよう私もがんばります。どこかでまた「ひさしぶり～」って会えることを楽しみにしています。

奥村 亜希

この学年は、私が初めてこの大学に来たときの新入生です。そういった意味で私と一緒に成長してきたと言える思い入れの深い学生たちでした。
ゼミを持って直接の指導をしたわけではありませんでしたが、授業やゼミの時間内でも課題の時も卒業制作の提出の瞬間も、妹や弟を持ったような感覚であなたたちを見守っていました。時には厳しく接したこともありましたが、愛情と思っていただければ幸いです。

卒業研究に関して皆さんそれぞれ受けた評価は様々だと思います。それでも4年間の成果を遺憾なく発揮できた作品に仕上がったと思います。
4年間、あっという間でしたが、あなたたちの貴重なこの時期を一緒に過ごせたことをうれしく思います。

長井 典子

今年も、四年間の学修の集大成として、学生諸君がまとめた卒業研究・制作の発表を、視聴する機会を得た。

昨年度から採用された発表方式は、自分の視座で個々の作品をじっくり見ることができ、さらに選抜された作品については、他の教員の視座も窺いながら評価することができた。

作品の内容は多彩で広範囲にわたっているので一概にはいえないが、大多数の作品は、学生諸君が身近な生活に根ざした課題を探求・発見・創造したうえで、本学で修練した専門の知識・技術を駆使し、その課題解決に向けて、若者らしい多くの可能性を秘めた提案を行っていたように思う。

これらの作品に込められた提案が、卒業研究のための一過性の課題解決にとどまることなく、これから雄飛する実社会の中で実務を通して、発展的に有効に生かせるようなものに昇華させてくれることを期待している。

岡井 豊治

人間環境デザイン学科 教員

教授

学科長　三井田康記
主　任　斉藤　功子
佐藤　昌子
藤井　豊史

准教授

東　実千代
加藤　信喜
金敷　大之
中山　　順
村田　浩子

講師

李 沅貞

助手

奥村　亜希
長井　典子

特任講師

岡井　豊治

作品集　編集委員

長井　典子
奥村　亜希

阪口　修平
木田　尚子
桐山　翔平
牛房　誠也
齊藤　隆文
坂口　光亮
左近　　諒
築地　美希
蓮見　彩衣
逸見　優衣
彌栄 ゆうき
山本　　咲
葛井　　愛
櫻井　駿也
髙井乃利古
林　　克彦
松谷　美紀
峯廻　雄一

卒業制作・論文作品集 4

2010年3月23日 発行

発行　畿央大学　健康科学部
　　健康生活学科　人間環境デザイン専攻
　　代表　学長　冬木 智子
　　〒635-0832　奈良県北葛城群広陵町馬見中4-2-2
印刷　株式会社　明新社